

■新門先生を逆転レイプで生徒姦

女教師・新門めぐみ。彼女は普段は体育担当の教師として働いているが……
その実態はドライブヘッド隊員の一人。
学生である隊員の監視役を務めており、正体がバレそうになると即座に場を収める任務を与えられている。

【実はボク、ドライブヘッドの……】

「あ〜〜ら〇〇くん？ 雑談しないで、この前 授業を休んだ分の特別補習に行くわよお♪」

うっかり正体を明かそうとする男子生徒を引き寄せ、アームロックばりに拘束。
そのまま引き摺ってその場から離れ、欠席した分を補う『特別補習』に連れて行く。

「あなたがドライブヘッドの一員だってことは秘密だって言ってるでしょ？」

密着したまま寝るめぐみ。男子は謝るが、正体を明かそうとしたのは一度や二度ではない。
男子を個室に連れ込むと、めぐみは罰として今までにない秘密の訓練を課すことにした。

【新門先生、特訓って……】

「ふふ♪ それはね……♥」

後ろから抱きしめながら、片手を男子の股間に這わせる。

「先生とセックスするのよ♪」

【セッ……ええっ?!】

「あなたがすぐ秘密を言っちゃうのは、堪え性がないから。それをセックスで鍛えるのよ♪」

とんでもない理屈で性行為を求めるめぐみ。無論これはただの口実。
前々から男子を狙っていためぐみ。
普段はスキンシップで性欲を抑えていたが……ついに我慢できなくなったのだ。

「先生 知ってるのよ？ あなたが先生に抱きしめられて興奮してるのを♪」

【せ、せんせえ……っ】

「ほおら、もうおちんちんが大きく……っ?!」

逆レイプの陶酔に浸っていためぐみ。だが男子の勃起を見た途端、嗜虐欲求が一気に引けていく。

(なっ、何？ このおちんちん……！ こんなに大きくなるものなの?)

実のところ経験はほぼ皆無なめぐみ。それでも勃起のサイズは保健やポルノ知識で知っていたつもりだったが、
男子のそれは知識を凌駕するものだったのだ。

【ほ、ほんとに新門先生とセックスしていいの?】

「え、ええ……本当、よ……? ただね、その……準備をね……」

(まずいわ……あんなものをプチ込まれたら、わたしの方が参っちゃうじゃない……♥)

期待に眼を輝かせる男子。対し、逆レイプをするはずだっためぐみは男子の絶倫精力に圧倒されてしまう。
牝として蹂躪される欲求が芽生え、狼狽える間にも押し倒される。
ジャージの下がずり下ろされ、丸見えになった地味なショーツもズラされて陰部が露出。
あっという間にマウントを取られ、挿入直前となる。

「ま、待ちなさいっ♥ 女の人は、準備が……」

【新門先生、いくよっ!】

ずばおおっ♥

「あひひひひひひひっ♥♥」

巨根が一気に挿入され、凄まじい快樂が全身を突き抜ける。
その愉悅は経験の浅いめぐみにはあまりにも刺激的であり、一瞬にして絶頂。背を仰け反らせて大声で啼いてしまっていた。

(おっ♥ おちんちん♥ 凄いいっ♥ こ、こんなに気持ち良いなんてえっ♥)

戦慄すら覚える被虐の快感。対して男子は担任教師を犯す快感に、必死になって腰を動かす。

【先生っ！ 先生のオマンコ、すごく気持ち良いよっ！ 先生はどう？ 気持ち良い？】

「き、気持ち良くなってくれたのね♥ 嬉しいわ♥ で、でも先生は♥ あひっ♥ もっと♥ 優しく……」

ずぼずぼずぼずぼっ♥

「くほおっ♥♥ おちんちいいん♥♥」

【先生も気持ち良くなってきてるんだね、よかった！ ねえ おっぱい触っていい？】

「ま、待ちなさいって♥ だから♥ あひいん♥♥ おっぱいはダメよお♥♥」

めぐみの言うことなど聞かず、男子はめぐみの胸に手を伸ばす。
決して豊かとは言えないサイズだが、経験のない男子にとっては充分魅力のあるものなのだろう。
指を食い込ませて揉みこね、乳首をクリクリと弄り回す。

「だからっ♥♥ おっぱいはあぁっ♥♥ おっひ♥♥ 乳首いいいん♥♥」

体験版はここまでです。続きは製品版で！